主日の福音 2025/12/25(No.1389)

# 主の降誕(夜半)( ルカ 2:1-14)

## 民全体に与えられる大きな喜び

主の降誕おめでとうございます。すべての人が幼子を抱きます。すべての人に誕生の神秘が与えられます。結婚した人、独身の人、年齢も関係なく、神は私たちに小さな命を抱く喜びと、神と共に歩む使命を与えようとしておられます。

今年取り上げたいのは、ご降誕が「民全体に与えられる大きな喜び」だということです。羊飼いたちがこの天使のメッセージを真っ先に聞いたのですから、羊飼いにとって「大きな喜び」となっているか、考えてみましょう。

考えるにあたり、身近な体験を引いてみます。中田神父の実家では牛を飼っています。動物はしばしば、月の満ち欠け、潮の満ち引きで生まれたり死んだりします。「野宿をしながら」という箇所を読みました。生前父親が月の満ち欠けの時間に合わせて子を宿した牛の様子を見に行っていたのを思い出しました。

夜中でも気を抜くことができませんでした。自力でお産のできない牛がときどきいて、出産のときに引っ張り出す補助をしていました。「野宿をしながら」という描写は、出産の近い羊がいないか、夜を徹して見守る様子なのかもしれません。

しかし、仮に子羊が生まれても、子羊一匹の命の価値はほとんどの人にとってはたいした価値ではないでしょう。そんな命ですが、羊飼いにとってはかけがえのない命です。そして大きな喜びです。「布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子」は、羊飼いだからこそ理解できる大きな喜びです。ふだん誰からも見向きもされない「小さな命」と彼らはいつも向き合っているからです。

去年の夜半のミサの始まりに、中田神父が取った「小さな思いつき」に気づいた人はいるでしょうか。ミサの始まりは、御子様を主任司祭が抱いて入堂しました。けれども馬小屋の飼い葉桶に安置する直前、当時の洪助祭に渡して安置させたのです。ご本人が気付くかどうかは分かりませんが、もしもどこかで、彼のところに助祭が来たとき、思い出してくれたらいいなと思っています。助祭として御子様を安置するチャンスは、生涯に一回だけなのです。

助祭の時に御子様を安置した経験は、司祭職のキャリア全体からすれば何十分の一かもしれません。この、誰も気づかないかもしれない小さな思いつきのおかげで、去年中田神父は「民全体に与えられる大きな喜び」を味わったのです。「小さな出来事を通して神が示す大きな喜び」を味わったのです。

現代では、教会の中で体験する喜びは、世の中の人々にとって取るに足りない、見向きもしない喜びになってしまいました。堅信式の喜びよりも、部活での全国優勝の方が喜びは大きいかもしれません。教会での結婚式よりも、その後の披露宴の方を本人たちは喜んでいるかもしれ

ません。何度もお色直しをすれば、人々から喝采を浴びるでしょうから。

そんな時代ですが、神はカトリック教会が受け継いだ信仰の中で「民全体に与えられる大きな喜び」が示されるのです。泊まる宿が与えられず、助産師にも恵まれず、衛生状態も良くない場所に置かれた乳飲み子から、「すべての人の希望」「夜を照らす光」が始まったのです。

この夜半のミサから、もう一度教会で体験する喜びが私にとって「大きな喜び」になっているか。馬小屋の前で各自問い直すことにしましょう。

主の降誕(日中)(ヨハネ 1:1-18)